「服飾雑誌」の歴史的成立®
——1950〜60年代の『装苑』の誌面構成と読者の変容に焦点を当てて

工　藤　雅　人（東京大学大学院生）

1．はじめに

1950年前後から，徐々に読者を増やしていった雑誌群があった。服装に関連する情報を主要なコンテンツとした雑誌である。例えば，文化服装学院から発行されていた『装苑』は1952年に毎日新聞社が行った読書調査では「いつも読む雑誌」の20位となっており50年代から70年代半ばまでほぼ毎年20位以内に入っている（毎日新聞社編　1977：255-269）。1949年に『ドレスメーキング』（鎌倉書房），1955年には『若い女性』（講談社）など，1950年前後には服装に焦点化した雑誌の創刊が相次いでいる。前述の読者調査でも『若い女性』は56年以降70年代半ばまでほぼ毎年20位以内に，また『ドレスメーキング』は59年に18位になりそれ以降ほぼ毎年30位以内に入っている。また，女性読者に限定すれば『装苑』と『若い女性』は60年以降70年代半ばまで10位前後を保っている（毎日新聞社編　1977：255-269）。発行部数は1955年時点で，『若い女性』が22万部，『装苑』が30万部強，『ドレスメーキング』が25〜30万部であり（出版ニュース社編　1956：27），これらの雑誌が決して少なくない読者を得ていたことがわかる。

このような服飾に焦点化した雑誌が研究の対象とされることは少なかった。女性雑誌研究においては，『an・an』（平凡出版）が創刊された1970年を画期として，「四大雑誌」を中心とする「『主婦』の時代」（坂本佳鶴恵　2000）が終焉を迎えたとされている[(1)]。このような「実用派雑誌」（岡満男　1981）から「新興女性誌」（井上輝子　1985）へという図式の下では50年代から60年代は，石田あゆうが鋭く

指摘したように女性雑誌の「過渡期」という位置づけしか与えられえない[(2)]（石田あゆう　2008）。

しかしながら，「新興女性誌」，特に井上が「ファッション系女性雑誌」と名付けた雑誌の，「語呂の良い音を合わせた横文字のナンセンスタイトルをもつこと」，「カラーグラビアを多用した紙質もよく，誌型も大判のビジュアルな雑誌であること」，「女性雑誌の『三種の神器』と言われた芸能・セックス・皇室に一切言及しないこと」という三つの特徴のうち（井上前掲：37），後二者は前述の雑誌群にも十分にあてはまるものであり，必ずしも1970年以降の特徴とはいえないだろう。

このような研究状況のなかで，石田は「昭和30年代」に週刊誌や『若い女性』などの月刊誌の創刊とともに「若い女性」という読者が「発見」されたことを明らかにし，女性雑誌において1970年以前にも大きな変化があったことを指摘している（石田前掲）。石田の重要な指摘を受け継ぎながら本稿では，50年代から60年代に「婦人雑誌」とは異なるものとして，また「新興女性誌」へと繋がっていく雑誌としての「服飾雑誌」が成立したことを，編集部／誌面構成／読者という三つの側面に注目することで明らかにし，さらにその歴史的背景を検討していく。

本稿では『装苑』を対象に分析を行う。『装苑』を分析対象に選んだのは二つの理由による。第一に50年代から60年代にかけて発行されていた服飾に焦点化した雑誌のうち発行部数が最も多く，代表性という点で適当であると考えられるからである。第二に一つの雑誌の変化に注目するということが方法として有効であると考えられるからである。これまで女性雑誌の変化は個々の雑誌の創刊の日付をもって説明されることが多かったが，創刊後にその内容が変化することは少なくないことが指摘されており（難波功士　2009），代表的な一つの雑誌に限定し，その変化を追うことによって，女性雑誌の歴史的変容をよりはっきりと明らかにすることができると考えられる。以上の理由から，本稿では『装苑』に焦点を当て，特に「読者投稿」および「編集後記」を取り上げ，検討を行っていく。

本稿では以下のような理由から『装苑』を対象に雑誌カテゴリー，誌面構成，読者・読み方の変化を検討していく。まず，読者や編集部による雑誌カテゴリー認識の変化を追うことで，彼女／彼らにとっての『装苑』とその他の雑誌との関係づけの変化を読み取ることができるからである。また，「新興女性誌」は「誌型も大判のビジュアルな雑誌」という形式的特徴がある雑誌として位置づけられてきた。これらの歴史的つながりや断絶を検討するには形式という側面に注目す

る必要がある。そのため，誌面構成の変化を検討していく。最後に，読み方の検討をおこなうのは，雑誌の掲載内容の変化に注目することによる歴史的予断を排除するためである。『an・an』の特徴として既製服しか掲載されなかったことが指摘されるが（上野千鶴子　1992；稗島武　2005など），この指摘の前提にあるのは，既製服の普及によって購入できるものが増えたという認識である。しかしながら，既製服が「吊るし」と呼ばれていた頃，既製服は仕立てた洋服よりも劣るものと考えられており，この評価基準を念頭に置けば，既製服の掲載が選択肢を拡大させたとは言えない。既製服の購入が現在では当然であるように，既製服普及以前は自分で，あるいは誰かに仕立ててもらうことがごく普通のことであった。入手方法は異なってはいるが，過去と現在のそれぞれの当事者から見て当たり前であるということを考えれば，洋服を入手するという点では両者とも同じ行為であるといえる。一方で，一貫して洋服入手のために雑誌は読まれてきた。1955年の調査でも（『若い女性』1955年9月号「流行をどうとり入れているか」），1993，1994年の調査でも（中島純一　1996：168），この点に変化はない。入手方法が変化しているにもかかわらず，雑誌が一貫して洋服の入手のために読まれてきたことこそ注目すべきである。雑誌を読むという入手以前の行為に着目することで，入手方法の変化とは異なる，洋服入手と雑誌との関係の歴史的変化を読み取ることができるのではないかと考えられるため，読み方の変化を検討する。

本稿では，まず分析対象である『装苑』の歴史的背景を詳述する（2章）。次に，「服装（研究）雑誌」から「服飾雑誌」へという雑誌カテゴリーの大きな変化が1960年頃を境に起きていることを確認したうえで，50年代から60年代までの「服装雑誌」・「服装研究誌」としての『装苑』の特徴とその変化を誌面構成，読者，読み方という点から明らかにする（3章）。さらに1960年頃以降，誌面構成が写真などのビジュアルが中心のものへと変化していったこと，それとともに新たな読者及び読み方が成立したことをみていく（4章）。最後に1960年頃の「服飾雑誌」が「婦人雑誌」からどう離脱し，「新興女性誌」とどのように連続していたかを考察していく（5章）。

2．『装苑』創刊の歴史的文脈

本章では，50年代の『装苑』を検討する前に，『装苑』の創刊の経緯および発行母体である文化服装学院が設立された歴史的文脈を確認していきたい。文化服

装学院は1922年６月に文化裁縫学院として誕生し（大沼淳　1963：18），1923年６月に「東京府各種学校令により，わが国初の服装教育学校として，東京府から認可」され，文化裁縫女学校として創立された（大沼前掲：24）。1935年に財団法人並木学園という新たな法人へと組織替えを行い洋裁学校としては日本で初めて法人として認可され（大沼前掲：74），1934年には現在に続く文化服装学院へと改称した。[3]

「文化服装学院」の創立には，生活改善運動の流れをくむ服装改善運動が大きな要因となっている。「生活改善運動」とは第一次世界大戦後の物価暴騰に対処するために経済的合理化，また同時期に女性の「職業進出」が推奨されたことによって家事などの家庭生活の合理化が追求された運動であった（小山静子　1991：145；中山千代　1987：359）。「服装改善運動」はこの一環として展開されたもので，合理化が，より具体的には「服装改善には洋服化」が必要であるという結論に至り（中山前掲：363），「洋装化実現のためには，洋裁技術と洋裁知識」をひろめることが必要とされ，そのための書籍の発行などの活動が展開された（中山前掲：366-367）。

「文化服装学院」はこのような歴史的文脈のもとで誕生したのである。1923年に東京府に提出された私立学校設立認可願には「文化的服装を研究し，その服装上の技術と知識を授け，その改善並びに普及を図り，併せて婦徳を涵養するを以て目的とす」と設立趣旨が明記されていた（文化服装学院　1989：28）。このように「文化服装学院」は経済的かつ合理的であるとされた洋服をつくる裁縫技術の普及を目的として設立された。

『装苑』はこの「文化服装学院」から機関誌として1936年に創刊された。創刊の辞には「服装の改善とその普及とを図り度いと云ふ熱望をもって生まれ出でたものである」とあり（『装苑』1936年４月号），服装改善のための技術の普及を意図して発行されたことがうかがえる。以上のことから確認しておくべきなのは，『装苑』は家事などの家庭生活の合理化を遂行していこうという歴史的動きの中で創刊されたことである。その後，休刊を経て1946年７月に『装苑――服装研究』として復刊した。ただし，この時点では，未だ機関誌の域を超えてはおらず，「一般書店売りの雑誌」となったのは，1950年から51年ごろのようである[4]（今井田勲　1980a：291；今井田勲　1980b：38）。以上，極めて簡単ではあるが，『装苑』の創刊へと至った経緯を確認してきた。次章では，「一般書店売りの雑誌」としての『装苑』の特徴を見ていきたい。

3．1950 年代の「服装雑誌」・「服装研究誌」としての『装苑』

3－1　婦人雑誌でもおしゃれ雑誌でもない「服装雑誌」・「服装研究誌」

本章では 50 年代の『装苑』を検討していく。まず，『装苑』が編集部及び読者からいかなる雑誌カテゴリーとして認識されていたのかを見ていきたい。「編集後記」および「読者投稿」において，『装苑』に対して与えられたカテゴリーをまとめたものが，図 1 である。これが，女性雑誌一般のカテゴリーの歴史的変化と一致しているとは言えないが，比較的はっきりとした変化が表れていることは明らかである。すなわち⑴ 1960 年ごろを境に「服装研究誌」および「服装雑誌」が使われなくなったこと，⑵「婦人雑誌ではない」および「おしゃれ雑誌ではない」という認識がほぼ 1960 年ごろまでであること，⑶「服飾雑誌」が 1957 年にはじめて使われて以来，60 年代を通して相対的に長く用いられていること，以上の三つである。より単純化していえば，1960 年頃に『装苑』は雑誌カテゴリーという点で大きな変化が起きていることがわかる。以下では，50 年代と 60 年代とに大まかに分けたうえで，本章では前者を次章で後者を検討していく。

		服装研究雑誌		服装雑誌		服飾雑誌		ファッション雑誌		婦人雑誌ではない		おしゃれ雑誌ではない				服装研究雑誌		服装雑誌		服飾雑誌		ファッション雑誌		婦人雑誌ではない		おしゃれ雑誌ではない	
出版年	月	編	読	編	読	編	読	編	読	編	読	編	読	出版年	月	編	読	編	読	編	読	編	読	編	読	編	読
1948	3			○										1958	3				○								
1951	4									○					5	○										○	
	6	○													7						○						
	7										○			1959	7					○							
	9	○													11					○							
1952	4	○	○											1960	12	○											
	8	○												1961	6		○										
	9										○			1952	5					○							
	11	○										○			11					○							
1953	1	○												1963	4									○			
	3			○										1964	1										○		
	5	○								○					2								○				
1954	8		○												7						○						
	9									○					9					○							
	11			○										1965	1						○						
	12		○										○		5								○				
1955	3		○		○										10								○				
	6														11						○						
	7			○										1967	4						○						
1956	2										○				5								○				
	3	○	○									○			8								○				
	5	○													10								○				
	7	○													11					○		○	○				
	11				○									1968	3								○				
1957	1			○			○								4						○						
	3	○													6					○							
	4	○													12						○						
	6						○							1969	2								○		○		
	7				○	○									4							○					
	9	○										○			12					○							

（「読」とは読者によるもの，「編」とは編集部からのものをさす）

図 1　「読者投稿」および「編集後記」における『装苑』の雑誌カテゴリーの変化

まず，(1)および(2)について検討していこう。図1からも分かるように，60年ごろまで，『装苑』は「服装研究雑誌」もしくは「服装雑誌」とされていた。特に，編集部からは『装苑』は「服装研究雑誌」であると繰り返し強調されている。復刊第2号では「本誌の唯一の目的は服装の正しい指導に在る」とその目的が宣言されており（『装苑』1946年8月号「編集後記」），さらに，副題が「服装研究」とされていることからも，「服装研究雑誌」としての自負を読み取ることができる。では，「服装研究雑誌」とはどのような雑誌なのであろうか。以下では，「婦人雑誌ではない」という主張，および「おしゃれ雑誌ではない」という主張に注目し，検討していこう。

「婦人雑誌」との違いは，端的に「服装」に焦点化した雑誌である，という点にあった。文芸欄開設を求める読者に対して（『装苑』1951年9月号「読者投稿」；1952年2月号），編集部は他の読者の意見を乞い（『装苑』1952年3月号「読者投稿」），その結果，「『文芸そのものは大好きなのだが，装苑は服装研究一本でいくべきだ』という反対意見が多数を占め」たことから（『装苑』1952年4月号「読者投稿」での編集部の回答），開設を見送っている。料理記事掲載の要望に関しても同様の理由で掲載を見送ったが，読者からは「ありきたりの婦人雑誌と同じになってしまう」と編集部の判断に賛同する意見が寄せられている（『装苑』1952年9月号「読者投稿」）。このように，「婦人雑誌」とは服装に特化した雑誌であるという点で異なるものとして認識されていたのだ。

次に，「おしゃれ雑誌」との違いを見てみよう。「おしゃれ雑誌」ではないという主張は合計6度なされているが，その全てが「服装研究誌」と対比させられている。例えば，「おしゃれ雑誌は，現在発行されているもので沢山だと思う。あくまでも本誌はまじめな服装研究雑誌でありたい」と編集部が述べている（『装苑』1952年11月号「編集後記」）。また，ある読者は「おしゃれ雑誌に堕しがちな服装研究誌」のなかで『装苑』はそのままであってほしいと述べている（『装苑』1954年12月号「読者投稿」）。つまり，『装苑』は「研究誌」であるという点で「おしゃれ雑誌」とは異なるものとして認識されているのである。

このように，1950年から60年ごろまでの『装苑』は服装に特化しているという点で「婦人雑誌」と異なり，また，「研究誌」であるという点で「おしゃれ雑誌」とは異なる「服装研究誌」あるいは「服装雑誌」として認識されていた。1950年以前については本稿の対象外であり断定することはできないが，以上の分析からは，1950年ごろから60年ごろまで「服装雑誌」・「服装研究誌」が，「婦

人雑誌」とは異なる服装に特化した雑誌を指す雑誌カテゴリーとして用いられており，『装苑』もこのカテゴリーに入る雑誌として認識されていたと言えるだろう。

３－２　誌面構成の変化／「デザイン」と「技術」の参照関係の強化

前節では，雑誌カテゴリーとしての「服装雑誌」・「服装研究誌」の特徴を検討してきた。本節では，当時の『装苑』の誌面構成がどのようなものであったのかを考察していく。1946年７月に発行された復刊第１号の目次は「スタイル集」，「新生日本の服装を語る」，「技術欄」の順で三つに分けられている。「スタイル集」とはデザイン画が掲載されている箇所であり，「新生日本の服装を語る」は今後のあるべき服装のあり方など服装に関する記事が掲載され，「技術欄」では作り方の指導がなされている。この三つの分類はこれ以降も続いている。目次上の分類では「口絵」および「技術欄」という二つに分けられることが多く，また，例えば「口絵」が「グラビア」や「グラフ」，「デザイン」など，「技術」も「技術解説」などそれぞれの呼称自体は変化するが「口絵やグラビア欄」，「服装の記事欄」，「作り方などの技術欄」という三つからなる基本的な誌面構成は復刊以降しばらく続いていく。以下では，「口絵やグラビア欄（以下「デザイン欄」）」と「作り方などの技術欄（以下「技術欄」）」との関係の変化に焦点を当て，検討を行っていく。

両者の関係に大きな変化があらわれるのは1951年９月号である。本号より「技術欄」のサブカテゴリーとして「表紙口絵グラビア解説」が登場し，表紙やグラビアの製図つきの解説がなされている。それまで「技術欄」では製図とモノクロの小さなデザイン画が解説とともに掲載され，「デザイン欄」にもただデザイン画やグラビア（＝写真）が掲載されるだけであった。つまり，本号以前はたとえ「デザイン欄」に気に入ったものが掲載されていても，デザイン画あるいは写真から製図を引くことのできない読者はそれを作ることができなかった。しかし本号より「デザイン欄」に対して製図が載せられ，解説が加えられるようになり，そのような読者でも製図を読むことができれば作ることが可能となった。誌面構成上それまで独立していた「デザイン欄」と「技術欄」が結びついたといえる。

52年１月号からは「誰もが着られるデザイン」をテーマとする「装苑スタイル」が登場する。これは「デザイン欄」でデザインが紹介され，それを「技術欄」で製図つきで説明するというものである。さらに，図２のように，同年10月号からはこの「装苑スタイル」のグラビアと製図が見開き左右隣りあわせで掲載され

図２　「装苑スタイル」
『装苑』1952 年 10 月号

るようになる。右ページにグラビアが布地の要尺，生地代とともに載せられ，左ページには製図が載せられ，デザインの特徴，製図の引き方，縫い方の注意とともに詳細に説明されている。編集部は「製本費が大へん嵩む」にもかかわらず「何といってもこの方が読者のみなさんに便利だと考えた」ことからこの形式を実行したと述べており（『装苑』1952 年 10 月号「編集後記」），編集部が洋服を作る読者を意識した誌面構成を行っていることがわかる。

このやり方は 53 年７月号から再び分割され，また「装苑スタイル」自体が 53 年８月号をもって終了している。再び見開きでの掲載をもとめる読者の意見に対して，編集部は「装苑スタイル」は消えたのではなく，誌面全体へと広がったのだ，と再掲載しない根拠を説明している（『装苑』1953 年 10 月号「読者投稿」）。

グラビアと製図の見開き左右隣りあわせという「デザイン欄」と「技術欄」の融合は，「装苑スタイル」の終わりとともに消えていったが，それに代わる変化が 53 年８月号以降の目次上にあらわれている。図３のように，一つの見出しに対して，「デザイン」と「製図」の二つのノンブルが示されている。この「デザイン」とは「デザイン欄」を指している。つまり，目次上で結びつきを可視化させているのである。見開き左右隣りあわせという誌面上の直接的な結びつきは消えていくが，「装苑スタイル」という形で結び付けられた「デザイン欄」と「技術欄」の参照関係はより広く誌面全体へと拡大していったのだ。

実際の洋服が掲載されている「デザイン欄」と製図などの「技術欄」との結びつきの強化を求める意見が多くの読者から寄せられ，1958 年１月号で一度全ての製図を掲載するというかたちで実行されたが，その後 1966 年１月号まで本誌上では実現していない。

このような「デザイン欄」と「技術欄」との関係に対して，1959 年 10 月号から興味深い解決法が試みられている。「本誌はデラックスなスタイルブック，付録は親切正確な技術指導書」とし（『装苑』1959 年 10 月号「編集後記」），「技術欄」を付録として独立させるというものである。「編集後記」には「本誌一本主義で読者に奉仕するのが，本来の考え方だと思います。私たちは十月号から付録は廃

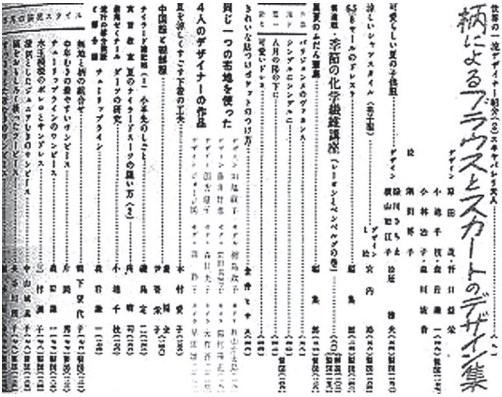

図３　目次『装苑』53 年８月号

止したいとさえ考え」たと，分割という形式に至る理由が述べられている（『装苑』1959 年 10 月号「編集後記」）。目次分類上の三区分はなく，本誌には技術関連の記事は一切ない。製図の掲載を要求する読者の声に対して，製図などの「技術欄」を付録としてまとめ，本誌とは別にすることで編集部は応えようとした。これによって完全ではないにせよ，以前よりも多くの「技術」つき「デザイン」を掲載できるようになったのだ。

ここまで「服装雑誌」としての『装苑』の誌面構成を検討してきた。ここから明らかになったのは，「デザイン欄」と「技術欄」の関係性を中心として誌面構成上の変化がおきており，両者の参照関係が徐々に強化されていった，という点である。より具体的には，1951 年９月号において参照関係が限定的ながら成立し，52 年１月号以降徐々にその関係が強化されていった。そして，1958 年１月号において完全な参照関係が作り上げられた。さらに，1959 年 10 月号より，本誌と付録を「デザイン欄」と「技術欄」として分割することで，完全ではないものの一定の参照関係を維持することが目指された。では，この変化はなぜ起きたのであろうか。次節では読者に注目して，この変化の原因を検討していこう。

３－３　作る読者

「服装雑誌」・「服装研究誌」としての『装苑』はどのような目的で読まれていたのであろうか。復刊後，読者投稿欄が初めて設けられた 1950 年３月号には，二人の読者からの投稿が掲載されているが，北海道に住む女性読者は，「初心者の私にとって本誌は他誌を抜いてすばらしく，わかりやすくて，よろこんでおりますが，デザインに対する布地の扱い方が良く分かりません。（中略）布地の構成用途等もくわしく御指導下されば，うれしいと思います」と要望を述べている（『装

苑』1950年３月号「読者投稿」)。ここからは，この読者が「洋服を作る」という明確な目的を持って読んでいることがわかるが，これは当時の典型的な『装苑』の読み方であった。

「作るために」読んでいる読者が多いことは，読者の要望からも窺える。例えば，「グラビアのスタイルを製図しようとすると，ダーツや切替えの位置が不鮮明で困っています。絵も一緒に載せていただけませんか」と洋服をつくる際の不便さの改善の要求(『装苑』1951年10月号「読者投稿」)，「デザインの解説を一頁でも増やして」ほしいという要望(『装苑』1952年４月号「読者投稿」)や「デザインの製図を一つ一つ入れていただけないでしょうか」という意見(『装苑』1952年８月号「読者投稿」)など，誌面の改善を促す投稿が多くの読者からなされている。なかでも，製図，特に気に入ったデザインがあっても製図が掲載されていないために作ることができないと，全てのデザインの製図の掲載を求める読者は多かった(『装苑』1956年８月号「読者投稿」；10月号；1957年９月号；11月号)。前節でみたような誌面構成の変化は，このような読者の要望への返答であった。

このような要請を受け1958年１月号では掲載された全てのデザインの製図を載せる試みをしている。編集後記では，「全部のデザインに製図をつけて」ほしいという「要望が大へんに強かったこと」から「新年号をためしとして，全部に製図をつけてみることにしました」と掲載の趣旨が述べられ，「全部製図をつけてゆくか，それともこれまでのやり方がよいか，どうぞ活発な意見を直接編集長宛にどしどしお寄せください」と読者の意見を乞うている(『装苑』1958年１月号「編集後記」)。

この試みに対しては多くの読者が賛成したが(『装苑』1958年２月号「読者投稿」；３月号；４月号；５月号)，全ての製図が掲載されることはこれ以降しばらくなく，そのため，読者からは掲載を求める投稿が繰り返し寄せられた(『装苑』1962年３月号「読者投稿」；10月号；1964年２月号；５月号；11月号；1965年１月号；９月号；12月号)。

このように「服装雑誌」・「服装研究誌」としての『装苑』は，「洋服を作るため」に読まれていた。また，この読者たちは『装苑』に対して，より多くの製図の掲載を求めていた。「デザイン欄」と「技術欄」との参照関係の強化は，このような読者からの要請に応えるためになされていたのだ。

３－４　読者内部での専門性の違い

前節では，『装苑』が「洋服を作るため」に読むという読まれ方をしていたことを確認してきた。しかし，注意しなければならないのは，読者の洋服製作能力は必ずしも一定ではなかったということである。本節では，作る読者の中の専門性の差を検討していこう。

洋服を作るということを想定した場合，読者は専門的能力という点で三つに分けられる。(a) デザイン画から製図を引くことのできる読者，(b) デザイン画から製図を引くことはできないが，製図を読むことができ，サイズに合わせて型紙を引くことができる読者，(c) 製図を引くことができないが，型紙からは作ることのできる読者。２節でみたような誌面構成上の「デザイン欄」と「技術欄」との結びつきの強化は，おもに (b) の読者からの要望に応える形でなされていた。しかしながら，すべての読者が (b) であったわけではない。1956 年 1 月号には実物大の型紙が付録として付けられたが，ひとりの読者から「装苑を読むほどの人なら，製図だけで充分自分で裁断できると思います」(『装苑』1956 年２月号「読者投稿」) という批判がなされた。これに対して，ある男性読者は「裁断のできない人は装苑が必要ないように受けとられます。(中略) 装苑の愛読者は，もっともっと広範囲にわたっておるはずです」(『装苑』1956 年 4 月号「読者投稿」) と反論を加えている。これは，洋裁を習っていた読者にもあてはまるようであり「洋裁を少々やった」にもかかわらず「付録の型紙を使う」という読者もいた (『装苑』1955 年 9 月号「読者投稿」)。

1955 年は洋裁ブームの真っただ中であり，全国に洋裁学校が 2700 校，通っている学生は 50 万人に達していたとされている (小泉和子編　2004：30)。その意味では，おそらく洋裁の技術が最も広く共有されていたはずの時点である。しかしながら，1950 年ごろを境に洋裁学校で洋裁を学ぶ女性に変化が現れていたことが指摘されている。すなわち，50 年頃までは，洋裁店の経営など手に職をつける目的で様々な年齢の女性が洋裁学校に通っていたが，50 年頃から「中等教育を終えた一定年齢の女性たちが」通うようになったのである (森理恵　2008：159-160)。前者の多くは主婦であり，内職で洋裁を行い家計を助ける者達，あるいは洋裁家として生活を支えていた女性たちであり，後者に比べ相対的に専門性は高く，(b) の読者であるといえよう。このように専門性の異なる読者がいるにもかかわらず，1959 年までの誌面構成上の変化，つまり「デザイン欄」と「技術欄」との結びつきの強化は，おもに (b) の読者からの要望に応える形でなされ

ていた。

本章では，50年代に「服装雑誌」・「服装研究誌」としてカテゴライズされていた『装苑』を，誌面構成と読者に焦点を絞って検討してきた。明らかとなったのは，内職をする主婦や洋裁家など当時は製図から洋服を作ることができる読者が比較的多く，彼女／彼らの要請に応えるように「デザイン欄」と「技術欄」の参照関係を強化する形で，誌面構成が変化してきたということである。

4．1960年代の「服飾雑誌」としての『装苑』

4－1　作る読者と作らない読者

3章では50年代の『装苑』を検討しデザインと製図の結びつきが誌面構成上徐々に強まっていったこと，それが「つくる読者」特に専門性の高い読者からの要望にこたえる形でなされていたことを明らかにしてきた。本章ではその結果として成立した本誌＝スタイルブック，付録＝技術解説という誌面構成が「作らない読者」の読み方といかにかかわっていたのかを検討していく。

『装苑』の読者は必ずしも「作る読者」に限られていたわけではない。言うまでもなく，「作らない読者」も存在していた。当時の編集長である今井田が述べるように，『装苑』は「洋裁店が相当買って」おり，「内職で“婦人服仕立てます”という人が多」かった（今井田勲・三枝佐枝子　1967：79）。実際，3章4節でみたように洋裁学校は花嫁修業の場という役割のみならず，生計を支える技術を得る場でもあった。製図の掲載を求める読者にはこのような専門性の高い「洋裁家」が多く含まれていた。しかしながら「なぜ製図つきがよいかと申しますとお客様というものは気まぐれで，私のおあずかりするもののうち半分くらいは製図つきでないものを選んでしまう」（『装苑』1958年3月号「読者投稿」）という「洋裁家」の読者からの要望からもわかるように，自ら作ることを想定していない読者（＝お客）が存在していた。実際，「私は，装苑をスタイルブックのように見るものですから（製図は見ません。ゴメンナサイ）」（『装苑』1958年5月号「読者投稿」）という18歳の女性読者のように，製図を見ずにデザインのみを見るという読者が現れている。「読者投稿」を確認した限りでは，このように作ることを念頭に置かない読者，製図などの「技術欄」を必要としないことを明言する読者はこの読者が初めてであるが，このような読者はこれ以降増えていく。

誌面構成の変化が「作る読者」からの要望にこたえる形で変化したことはすで

に述べた。しかしながら，その結果として成立した本誌＝スタイルブック，付録＝技術解説という誌面構成に対しては，「作る読者」から必ずしも良い評価が与えられたわけではない。直後の 1959 年 11 月号には 10 月号をすばらしいとほめながらも「付録と本誌とまとめて一冊にしていただけましたら，どんなにか便利だろうと思います。例えば本誌に発表されたデザインの製図を付録で求めるのは手間がかかります」と分割には難色を示す読者の意見が載せられている（『装苑』1959 年 11 月号「読者投稿」）。翌 12 月号で洋裁家のある読者から，自分の使い勝手からすれば一冊にまとめられていた方が望ましいが「お店でお客様にお見せするのに使う場合は便利」であるという評価がなされている（『装苑』1959 年 12 月号「読者投稿」）。このように誌面の分割は『装苑』をもとに洋服を作る読者からの賛同は少なかったが，「作らない読者」にとってはむしろ歓迎すべきこととされていたのだ。

このように，専門性の比較的高い作る読者からの要請に応える形で成立した本誌＝スタイルブック，付録＝技術解説という分割，「デザイン欄」と「技術欄」の分断は，むしろ作らない読者から肯定的な評価を得ることとなったのである。

４－２　誌面構成の変化／「ビジュアル」という点からの変化

「技術欄」と「デザイン欄」の関係の 1959 年の変化とそれに対する読者の反応は，その後の『装苑』の誌面構成の変化，さらに読まれ方の変化を考える上で注目すべきものである。なぜなら，それ以後，誌面構成は「技術欄」と「デザイン欄」の関係性を強化する方向には動いていなかったからである。1959 年 10 月号で「技術欄」が付録へと移り，目次上からも「技術欄」は消えたが，これは以降も変わらない。1966 年 6 月号からは再び「本誌」の巻末へと製図が戻り，該当グラビアページにおいて「製図〇ページ」と示され，関係性が回復されるが，関係性の強化へと至ることはない。

「技術欄」と「デザイン欄」の関係性の強化を重視とした誌面構成の変化が 1959 年まではなされていたが，それ以降同様の動きはない。むしろ，「ビジュアル重視」の姿勢が打ち出され始める。

大きな変化が起こったのは，創刊 30 周年記念号の 1966 年 11 月号であり，判型がそれまでの B5 判から縦が B5 判，横が A4 判サイズの「ワイド判」になり，綴じ方も無線綴じになっている。すでに，66 年 10 月号において「記念号は判型も姉妹誌の『ミセス』判にし，ビジュアルな衣に着替えて内容もさらに充実させ」

ると宣言していた（『装苑』1966年10月号「編集後記」）。ここで挙げられている「ビジュアル」とは視覚的な側面のことであるが，「読む雑誌」対「見る雑誌」という対比のもと，『ミセス』も『装苑』も後者の方向へ進むべきであると考えられており，67年８月号からは日本の雑誌でアートディレクターを採用しレイアウトにも注意を向けている[(5)]（今井田・三枝前掲：239-242；『装苑』1967年８月号「編集後記」）。このような「ビジュアル」への関心は，ノンブルにまで向けられている。「ページ数を示す数字がない場合」があるので，入れてほしいという読者からの要望に対して，「誌面ギリギリいっぱい使わないと効果が出せないということもまま起こる」ため「誌面効果を合わせ考えて」ノンブルを削ったと理由を述べている（『装苑』1967年３月号「読者投稿」）。このように，誌面構成において，それまでのように「デザイン欄」と「技術欄」の参照関係にはほとんど関心が払われていない。実質的には「デザイン欄」が本誌のほぼ全体を占めるようになり，他方で「技術欄」は縮小されていく。そして，誌面のほとんどを占める「デザイン」の「ビジュアル」な側面のみに関心が払われ，ノンブルに至るまで，改善が加えられていく。

このような誌面構成の変化に対して，読者からは好意的な反応が示されている。ある読者はワイド判になり「ページに迫力が出てきた」と述べている（『装苑』1966年12月号「読者投稿」）。無線綴じには「本の中央まであける無線とじってすばらしい」という感想が寄せられている（『装苑』1967年１月号「読者投稿」）。またある読者は「『装苑』のように魅力的，かつ斬新なデザインをこなした雑誌がほかにあるでしょうか」と賛辞を加えている（『装苑』1967年５月号「読者投稿」）。デザインなどの「ビジュアル」な側面に対しては「ワイド判になってからの『装苑』は確かにすばらしい。（中略）誌面の処理もぐんとデラックスになっているし，読みやすくなったのは，何よりほめなければいけない」（『装苑』1967年９月号「読者投稿」）など他の読者から肯定的な評価がなされている。

このように，1959年を境に誌面構成の変化の軸が，「グラビア欄」と「技術欄」の参照関係の強化から「ビジュアル」重視へと移り，さらに1966年からはそれが徹底されたことがわかる。

４－３　新たな読み方

前節では1959年以降「ビジュアル」に焦点化した誌面構成上の変化が起きていたことを見てきたが，本節では，同時期に起きた新しい読み方の成立を検討し

ていこう。ここまで自分で作るか否かという点から「作る読者」と「作らない読者」という二つの読者を設定してきたが，「作らない読者」がどのような読み方をしていたのかを以下では考察していく。

すでに述べたように，確認した限りで最も早く作らないことを明言していたのは「装苑をスタイルブックのように見るものですから（製図は見ません。ゴメンナサイ）」（『装苑』1958年5月号「読者投稿」）という18歳の読者であった。では，このような読者はどのように『装苑』を読んでいたのであろうか。「忙しい仕事を持っている上に不器用」なために作らないと明言するある読者は「しかし，洋装生活をしている以上，たえずセンスを磨く必要はあります」と述べている（『装苑』1959年2月号「読者投稿」）。この読者は『装苑』を「洋装生活」をする上での「センスを磨く」ために読んでいるという。別の読者は「おしゃれアドバイザー」という記事に最も惹かれたと述べている（『装苑』1961年4月号「読者投稿」）。「センスを磨く」ために読むという先の読者とこの読者は，自分の服装の参考のためによむ，という点で同様の読み方をしているといえる。

このような「服装の参考に読む」という読み方は，その後も広く見られるようになる。「ページを開いてみてびっくりしてしまいました。それこそ頭のてっぺんから足の先まで，おしゃれアドバイスが親切なんです。（中略）まさに装苑は，私の専属デザイナーです」という読者（『装苑』1961年6月号「読者投稿」），「毎月ハイセンスな内容の『装苑』のおかげで，私のファッションにたいするセンス，認識がすこしずつ向上していくような気がします。とくに〈あなたへのアドバイス〉のページが大好きです」という読者（『装苑』1964年11月号「読者投稿」）や「私が，『装苑』に求めてやまないのは，モードのリーダーシップということであり，おしゃれのよきコンサルタントであるように」と要求する読者（『装苑』1965年3月号「読者投稿」）がこのような読み方をする読者として挙げられる。

作る読者／作らない読者という二つのタイプに読者をわけ，本節では後者の読み方を検討してきたが，作る読者のなかにもこのような読み方をする者もいたであろう。しかしながら，重要なのは，本節で見てきたような新しい読み方が作らない読者をきっかけとして拡大していったということ，さらに，その変化が1960年前後からおきていたということである。

5．考察

5－1　婦人雑誌からの離脱

ここまで雑誌カテゴリーの変化を手掛かりに1960年以前と以後の『装苑』の違いを検討してきた。1959年までは専門性の相対的に高い読者からの製図の掲載要請に応える形で誌面構成の変化がおきており，変化の焦点は「デザイン欄」と「技術欄」の参照関係であったが，1959年以降は変化の焦点が「ビジュアル」へと移っていったことが明らかとなった。また読者・読み方という点では，作ることを想定しない読者が1960年前後から現われ「自分の服装の参考」あるいは「センスを磨く」ために読むという新たな読み方をしていたことがわかった。1960年頃に起きた上記のような比較的はっきりとした変化は，どのような歴史社会的文脈に位置づけられるのであろうか。新たな読者としての「若い女性」という点，および「婦人雑誌」からの分離という点に注目して考えてみよう。

石田あゆうは「婦人」とも「少女」とも異なるものとして昭和30年代に「発見」された読者層として「若い女性」を挙げている（石田前掲）。石田自身は明示していないがこの「若い女性」が当時「BG」と呼ばれた20歳前後の有職の女性読者を指していることは明らかである。中学あるいは高校卒業後にフルタイムの職につき結婚とともに退職しその後パートタイマーとして労働市場へと戻る，M字型就労という女性ライフコース上のパターンは50年代から60年代前半ごろに20歳を迎えた女性たちから現われている（岩井八郎　1990）が，「若い女性」とはまさにこの時期に結婚をひかえていた未婚の女性を指している。本稿が対象とした『装苑』においても「十八歳から二十三歳ぐらい」が読者として想定されおり（今井田・三枝前掲：197），1960年ごろから「BG」向けの記事が増えている。また後述するように『若い女性』も同様に未婚女性を読者として想定していた。

ではこの読者としての「若い女性」の成立とは，歴史的にはいかなる変化であったといえるのであろうか。それは，「実用派」婦人雑誌およびその読者が抱えていた両義性の解体である。つまり，家計の責任者としての消費主体（＝主婦）という側面を持たない読者の成立である。「実用派」婦人雑誌の読者は「『真面目』とされた女性消費者」／「『享楽的』とされた女性消費者」（石田あゆう　2001）あるいは「《主婦》的消費主体」／「《モガ》的消費主体」（北田暁大　1998）という両義性をもった読者であることが指摘されてきた。

「実用派」婦人雑誌と『装苑』はその起源を共有している。「文化服装学院」が生活改善運動のさなかに設立されたことは２章で述べたが，「実用派」婦人雑誌も家庭の合理化や効率的な家計管理の情報を提供する雑誌として成立していた（石田前掲　2001：57）。改善や合理化という点で婦人雑誌や主婦，「家庭」と密接にかかわっていた『装苑』は50年代に「服装」への特化を明確化し「婦人雑誌ではない」ものとして婦人雑誌からの自律を図り，1959年以降は「家庭」や「家事」との接点であった「製図」を誌面から排除し，中心的な想定読者であり「製図」を利用する読者であった主婦を周縁化することで，婦人雑誌からの離脱を成し遂げたのである。

読者としての「若い女性」とは，このような「実用派」婦人雑誌からの「服飾雑誌」の離脱とともに，前者が抱えていた両義性のうちの一方を携えた読者として成立したのである。結婚を控えた20歳前後の女性には，もはや「真面目」な「《主婦》的」な消費主体であることは要請されない。当時の婦人雑誌には付録で婦人服とともに子供服の特集が掲載されることが多かったが，『若い女性』では未婚の女性向けの洋服が誌面のほとんどを占めていた。創刊時に『若い女性』の編集長であった久保田裕は「婦人雑誌の付録だけほしい，中でも服飾面だけほしいという人がかなり多い。こうした服飾面だけに関心が強いのは，未婚の人に多い。その要求の強い年齢層に応えて服飾を中心に」した雑誌として1955年に『若い女性』を創刊したと述べている（尾崎秀樹・宗武朝子　1979：150）。未婚の読者は関心という点でも「主婦」とは異なり「服飾面だけ」にあった。「若い女性」とは単に発見されたというよりも，女性ライフコースの歴史的変化とともに新たに成立した読者層であったのだ。このことからは，1950～60年代が単なる「過渡期」ではなく，大きな変化が起きていた時期であったと言えるだろう。

５－２　「新興女性雑誌」との連続性

このように50年代から60年代をある種の「転換期」として捉えると，その後の「新興女性雑誌」特に「ファッション系女性雑誌」との連続性を読み取ることができる。これらの雑誌は既製服しか扱わないことが特徴として挙げられてきた。実際，『an・an』の創刊準備の段階で製図掲載の予定はなかったが，一方で読者が買える既製服を掲載するつもりもなかったと創刊に関わった赤木洋一は述べている（赤木洋一　2007：41-42）。創刊当時は既製服どころか「デザイナーの『作りおろし』」が掲載されており，購入できるものであっても編集部が価格を意識す

ることはなかったという（赤木前掲：170；三宅菊子　1977）。このことからは，『an・an』以前／以後を既製服のみを扱っているか否かで分けることが，妥当ではないということが分かる。「エルのモードページを見るときの快感，興奮，あこがれなどを」読者に提供することを考えていたという証言からは（赤木前掲：42），必ずしも既製服である必要はかなったとさえ思われる。そのように考えるなら，1959年10月号で製図を付録へと囲い込んだ『装苑』の本誌とその約10年後に創刊された『an・an』とは誌面が写真などのデザインのみで構成されているという点で共通しているといえる。そうであるならば，既製服の扱いというよりも，誌面上に製図がないことにこそ注目する必要があるといえる。

製図を排除し誌面を通して「快感，興奮，あこがれ」を与えようという送り手の意図は，読者の（読み方の）変化とも連関している。誌面構成上の変化のみならず，1959年10月を境として読み方にも変化が起きていた。すでに述べたように，作ることを全く想定せず「おしゃれの参考に」読むという読み方が初めて読者投稿欄に現れたのは，1958年5月号である。18歳のこの読者のように，作らないことを明言する読者がこのころから増えていく。このような読者にとって，製図は無用であるが，注目すべきはそれが，59年10月号の誌面構成の変化とほぼ時期を同じくして起きているということである。58年ごろには，「服飾雑誌」としての『装苑』の読み方の一方である，「おしゃれの参考」のため，あるいは「センスを磨く」ためという読み方をする読者が現れているのである。

発行部数から考えれば四大婦人雑誌が60年代を通して最も多かった。しかしながら，女性雑誌の歴史においては「『主婦』の時代」の真っただ中とされる1960年前後から，読者や読み方さらには誌面構成の点でその後の「新興女性誌」へとつながる変化が現われていたのである。

6．おわりに

本稿は『装苑』に注目し，誌面構成やその読み方がどのように変化してきたかを歴史を遡行することで明らかにしようとした試みである。それによって明らかとなったのは，1960年ごろを境として，作ることを目的とする専門性の高い読者を想定した「服装研究誌」・「服装雑誌」としての『装苑』から，センスを磨くという目的で読むBGなどの「若い女性」を読者とする「服飾雑誌」としての『装苑』への変化である。これまでの女性雑誌史においては1970年頃の「新興女性

誌」の創刊が「婦人雑誌」からの変容の契機とされていたが，本稿において明らかになったように，1960年頃を境として読者や読み方さらには誌面構成の点で「新興女性誌」へとつながる変化が現われていたのだ。

男性誌に目を向ければ，『男子専科』（スタイル社）が1950年に，1954年に『男の服飾』（婦人画報社。現在の『MEN'S CLUB』），1964年には『平凡パンチ』（平凡出版）が創刊されている。1957年から「文化服装学院」が男子学生の受け入れを始めており，この時期には女性のみならず，男性読者にも変化が起きていたと考えられる。この点については今後の課題としたい。

注

（1） ほかにも同様の認識を示しているものとして，（井上　1985；上野　1992；稗島　2005）などがある。

（2）「女性雑誌」以外の1950年代の雑誌メディア研究としては（阪本博志：2008）がある。

（3） 以下，本稿では，便宜上文化裁縫学院も含めすべてを「文化服装学院」と呼ぶ。

（4） このほかにも，『出版年鑑―1952年度版』から『装苑』への言及があり，また前述の読者調査においても1952年に初めて『装苑』が「いつも読む雑誌」の20位に挙がっている。このことからも1950年から51年頃に「一般書店売りの雑誌」となったと推測される。

（5） 平凡出版の清水達夫は1963年時点で『装苑』がアートディレクターを招いたと述べている（清水達夫：1970）。どちらが正確であるかは現時点では判断できない。

引用・参考文献

赤木洋一（2007）『「アンアン」1970』平凡社

文化服装学院（1989）『文化服装学院教育史―創設70年のあゆみと未来』文化学園・文化服装学院

稗島武（2005）「レディメイドと身体―女性ファッション誌『アンアン』に見る身体イメージの変遷」『社会学評論』56巻1号

堀内誠一（2007）『父の時代・私の時代―わがエディトリアル・デザイン史』マガジンハウス

今井田勲・三枝佐枝子（1967）『編集者から読者へ』現代ジャーナリズム出版会

今井田勲（1980a）『雑誌雑書館』書肆季節社

―――（1980b）『編集中記』書肆季節社

井上輝子（1985）「1970年代以後の女性雑誌界」井上輝子・女性雑誌研究会『女性雑誌を解読する―Comparepolitan―日・米・メキシコ比較研究』垣内出版

石田あゆう（2001）「大正期婦人雑誌における女性・消費イメージの変遷―『婦人世界』を中心に」『京都社会学年報』9号

―――（2008）「『若い女性』雑誌の時代」『文学』9巻2号

岩井八郎（1990）「女性のライフコースと学歴」菊池城司編『現代日本の階層構造３―教育と社会移動』東京大学出版会
北田暁大（1998）「『私的な公共圏』をめぐって―一九二〇～三〇年代「婦人雑誌」の読書空間」『東京大学社会情報研究所紀要』56 号
小泉和子編（2004）『洋裁の時代――日本人の衣服革命』OM 出版
小山静子（1991）『良妻賢母という規範』勁草書房
毎日新聞社編（1977）『読書世論調査 30 年―戦後日本人の心の軌跡』毎日新聞社
三宅菊子（1977）「『アンアン』と過ごした六年あまり」『総合ジャーナリズム研究』14 巻３号
森理恵（2008）「1950 年前後の日本における都市中流女性の衣服製作・着用をめぐる状況―雑誌「婦人朝日」記事の分析を中心に」『日本家政学会誌』59 巻３号
中島純一，1998,「メディアと流行の関係史」『メディアと流行の心理』金子書房，147-94.
中山千代（1987）『日本婦人洋装史』吉川弘文館
難波功士（2009）『創刊の社会史』筑摩書房
岡満男（1981）『婦人雑誌ジャーナリズム―女性解放の歴史とともに』現代ジャーナリズム出版会
大沼淳（1963）『文化服装学院四十年のあゆみ』文化服装学院
尾崎秀樹・宗武朝子（1979）『雑誌の時代―その興亡のドラマ』主婦の友社
阪本博志（2008）『『平凡』の時代― 1950 年代の大衆娯楽雑誌と若者たち』昭和堂
坂本佳鶴恵（2000）「女性雑誌の歴史分析」『お茶の水女子大学人文科学紀要』53 号
清水達夫（1970）「海外の雑誌社を訪ねて」『平凡通信この 10 年―平凡出版株式会社小史』平凡出版
出版ニュース社編（1952）『出版年鑑――1952 年度版』出版ニュース社
――――（1956）『出版年鑑――1956 年版』出版ニュース社
上野千鶴子（1992）『増補〈私〉探しゲーム』筑摩書房